

◆理事会(五十音順)

磯村 尚徳	外交評論家
大浦 紀彦	形成外科医
オスタン・ガエル(理事長)	PMC株式会社代表取締役
篠崎 康子	精神科医
ダヴィッド・パトリック	麻酔科医
寺島 左和子	形成外科医
早川 依里子	小児科医
原田 昌子	看護師
森川 すいめい	精神科医
山田 信幸	形成外科医
與座 聰	形成外科医

◆事務局(五十音順)

安達 洋子	ドナーリレーションアシスタント
阿部 さやか	ドナーリレーション
石井 夕美	総務・経理マネージャー
石川 尚	広報マネージャー／証言活動担当
小野寺 貴子	ファンドレイジング(企業パートナー)担当
熊澤 幸子	ラオスプロジェクト担当
畔柳 祥緒	事務局長
関 麻衣	ファンドレイジングマネージャー
園田 翔平	スマイル作戦担当
玉手 幸一	東日本プロジェクト／ラオスプロジェクト担当
中村 あづさ	東京プロジェクト担当
松井 智美	ファンドレイジングマネージャーアシスタント
メニニヤック・マジョリ	事務局長アシスタント／プロジェクトアシスタント

◆パートナー(五十音順・敬称略)

寄付・依頼金
 アサヒブリック㈱／アメリカン・エキスプレス・インターナショナル・インコーポレイテッド／いちよし証券㈱
 エーツーケア㈱／㈱HRインスティテュート／エドワーズライフサイエンス基金(CAF AMERICA)
 大阪マラソン組織委員会／外務省国際協力局民間援助連携室／㈱グリーティングライフ
 特活)国際協力NGOセンター(JANIC)／財)ジャパンギビング／特活)ジャパン・プラットフォーム
 湘南国際マラソン実行委員会／ジョンソン・エンド・ジョンソン㈱／日本CA㈱／Hearts Tree／BNPパリバ証券㈱
 ビムコジャパンリミテッド／㈱フェリシモ／フレンチブルーミーティング実行委員会／ヤフー基金
 日本労働組合総連合会／リンベル㈱／ロreal財団

※紙面の都合上、金額・継続期間等の基準による抜粋とさせていただきました。

2015年度にご寄付をいただきました全ての法人・企業の皆さまに対し、改めましてお礼申し上げます。

物品寄付

㈱エー・アンド・ディー／エクスコムグローバル㈱／クロスリンクマーケティング㈱
 特活)セカンドハーベストジャパン／農心ジャパン／ブジョ・シトロエン・ジャポン㈱／㈱プレスブルージャポン

イベント協力

㈱アクリスジャパン／アンスティチュ・フランセ東京／IKEBANA ATRIUM／ヴランケンボメリ－ジャパン㈱
 ヴィアーナジャパン㈱／エールフランス航空／LVHMモエ ヘネシー・ルイ・ヴィトン・ジャパン㈱
 グランドハイアット東京／在日フランス商工会議所／シャネル㈱／㈱NAOS JAPAN㈱
 バカラ・バシフィック㈱／BARON PHILIPPE DE ROTHSCHILD, ORIENT／㈱ビームス／Fauré Le Page
 フランス料理文化センター／My Little Box㈱／㈱メルローズ／LEONARD／ロンシャン・ジャポン㈱

プロボノ

デロイトトーマツ コンサルティング㈱／ホワイト&ケース法律事務所

世界の医療団 (認定NPO法人)

特定非営利活動法人メドゥサン・デュ・モンド ジャポン

Médecins du Monde Japon

〒106-0044 東京都港区東麻布2-6-10 麻布善波ビル2F

Azabu-Zenba Bldg. 2F, 2-6-10 Higashi-Azabu, Minato-ku, Tokyo

106-0044, Japan

Tel: +81-(0)3-3585-6436 Fax: +81-(0)3-3560-8073

E-mail: info@mdm.or.jp

www.mdm.or.jp



世界の医療団

2016年3月発行

2015年度 活動報告書



©Christophe Garot



©Olivier Papegnies



©Kristof Vadino



©Mylene Zizzo



©Guillaume PINON



©Olivier Papegnies

「誰もが治療を受けられる未来を。」

“POUR UN MONDE OÙ CHACUN PEUT ÊTRE SOIGNÉ.”



世界の医療団の使命は「治療」と「証言」です。



■ 2015年度に日本の皆さんにご支援を呼びかけた国

◆ 「世界の医療団」事務局

フランス・日本・ドイツ・アルゼンチン・ベルギー
カナダ・スペイン・アメリカ・ギリシャ
ルクセンブルグ・オランダ・ポルトガル
イギリス・スウェーデン・スイス

◆ 2015年医療ボランティア海外派遣実績

海外支援活動には、医師8名（阿久津麗香、大浦紀彦、岡田朋子、寺島左和子、早川依里子、本間康浩、森岡大地、與座聰）、看護師4名（新井朋美、川越昌子、木田晶子、山脇枝里子）が参加しました。

支援者の皆さんへ

世界の医療団 日本は、2015年に設立から20周年を迎えました。1995年1月に発生した阪神淡路大震災でフランスから緊急医療支援チームが派遣されたことをきっかけに発足し、これまでに日本のみならず世界各地で医療支援活動を続けてまいりました。皆さまからのご厚情があり、志をともにする医療ボランティアがいたからこそ実現することができました。ここに改めて深く感謝申し上げます。

バヌアツで猛威を振るったサイクロンでは国民の約半数が被災し、ネパールを襲ったマグニチュード7.8の大地震では3万人以上が死傷するなど、2015年前半には、自然災害による甚大な被害が発生しました。後半は、中東・アフリカ地域から戦火や迫害から逃れてヨーロッパを目指す難民が急増し、旅の途中で起こる悲惨な事故が後を絶ちませんでした。ひとりで旅をする子どもも多く、過酷な経験によって心的外傷後ストレス障害(PTSD)を発症するなど、心身両面でのケアが必要な状況が続いています。このような緊急事態に対し、世界の医療団は迅速かつ的確な医療支援活動を実施、継続してまいりました。これも、皆さまがお寄せくださったあたたかいご支援のお陰にはかなりません。

日頃から頂戴しております皆さまからの信頼とご支援に、今一度深くお礼を申し上げます。これからも世界の医療団は、医療へのアクセスを阻むものに立ち向かい、弱い立場にある人々に寄り添うとともに、必要な場所と人へ医療を届けることをここにお約束いたします。今後とも、私たちの活動へ変わらぬご理解とご支援を賜れますようお願い申し上げます。

世界の医療団 日本
理事長 ガエル・オスタン



【医療ボランティアの声】精神科医 森川すいめい

世界の医療団 日本は2010年から東京・池袋周辺で精神や知的に障がいを持ちながら路上で暮らさざるを得ない方々を対象に医療福祉支援活動を行っています。



日本でのホームレス状態にある人の数は7,000人弱(厚労省)とされ、ほとんどの日本人は自分の身に起り得る問題であるとは考えていません。他方で、例えばフランスでは、約350万人が適切な住宅を持つたず、約14万人は住まいがないという統計があり、誰もがホームレス状態に陥り得ることを多くの人々が実感しています。この背景には「ホームレス」の定義の違いがあります。「ホームレス」は、日本では路上で生活する者を意味しますが、欧米では安定した住まいを持たない人すべてを含みます。

ホームレス状態になる人々は経済的な弱者であり、何らかの障がいを持つ人も少なくないため、医療や福祉による支援が必要です。しかし、日本ではこうした専門的な支援がほとんどありません。

東京プロジェクトでは、この問題を解決すべく、皆さまからのあたたかいご支援のもと、日々活動に取り組んでいます。

今後は欧米で大きな成果を上げている支援モデル「ハウジングファースト」を本格的に推進していきます。このモデルは、ほとんどの人がホームレス状態から脱することができなかった旧来の支援モデルに対し、90%以上の人が1年以上住まいを得続けているといった画期的な方法です。

2015年は従来の支援活動を統合しながら、新たな取り組みに向けた準備を行うことができた実り多い年となりました。東京プロジェクトに従事できることを誇りに思うとともに、礎となっている皆さまからのご支援に心から感謝いたします。

Republic of Vanuatu バヌアツ

緊急支援



人間開発指数

(188か国中) 134位

5歳未満の乳幼児死亡率

(出生1,000人中) 16.9人

平均寿命

71.9歳

医師の数

(国民1万人あたり) 1.2人

南太平洋の島国バヌアツを、もっとも強い勢力であるカテゴリー5のサイクロン「パム」が直撃し、人口の半分以上の16万人以上(国連発表)が被災しました。世界の医療団は、サイクロン直撃後すぐに首都ポート・ビラに到着し、迅速な調査のもと、特に被害が大きく、医療へのアクセスが困難となっているタンナ島での活動を決定しました。タンナ島では、サイクロンによる被害に加え、以前からの医療システムの脆弱さが原因となり、住民が医療を受けることを困難にしていました。世界の医療団は、特に支援が手薄となっていた妊産婦のケアを実施するため、現地医療施設へ基本的な医療器具やヘッドライトなどを揃えた産科キットを輸送するとともに、看護師や助産師を派遣しました。

Republic of Nepal ネパール

緊急支援



©Olivier Papegnies

人間開発指数

(188か国中) 145位

5歳未満の乳幼児死亡率

(出生1,000人中) 39.7人

平均寿命

69.6歳

医師の数

(国民1万人あたり) —

2015年4月、ネパールで発生したマグニチュード7.8の大地震。震源地は、首都カトマンズからわずか約70キロメートルしか離れておらず、多くの住居、医療施設などの建物が崩壊しました。この大地震による被害は、死者8,800人以上、負傷者22,300人以上という甚大なものでした。世界の医療団は、シンドゥバルチョーク郡で母子保健の長期プロジェクトを展開していたことから、発災後すぐに情報収集を開始し、パリ本部から医師、看護師、ロジスティシャンを被災地に派遣するとともに、約19トンに及ぶ薬や医療器具などを輸送しました。また、急性期を過ぎたころから、支援が行き渡りづらい遠隔地やアクセスが困難な地域の住民へ医療を届けるために、車両やヘリコプターを利用した移動診療を実施しました。

Refugees 難民 (シリアを中心とした中東・アフリカ地域)

緊急支援

2015年、戦火や迫害から逃れ、シリアを中心とした中東・アフリカ地域からヨーロッパを目指す人の数が急増しました。難民たちは、小さなゴムボートや定員をオーバーした密航船で地中海を渡るため、事故が多発し、幼い子どもを含む多くの命が失われています。また、無事にヨーロッパにたどり着いた人々も、いくつもの国境を歩くで越えなければならないなど、身体的、精神的に過酷な状況にあります。難民キャンプでは、多くの子どもたちが心的外傷後ストレス障害(PTSD)を発症しており、不眠、摂食障害、うつ病などの症状に苦しんでいます。世界の医療団は、難民の出発の地から経路となるあらゆる場所で、ヨーロッパ11か国にもつネットワークを駆使し、緊急支援を実施しています。



©David Brunetti

シリア

人間開発指数

(188か国中) 134位

5歳未満の乳幼児死亡率

(出生1,000人中) 14.6人

平均寿命

69.6歳

医師の数

(国民1万人あたり) 14.6人

Laos ラオス

長期支援(小児医療プロジェクト)

東南アジアの内陸部に位置し、タイ、ベトナム、中国、カンボジア、ミャンマーに囲まれた小さな国、ラオス。5歳未満の子どもたちの死亡率は周辺国と比べても高く、医療基盤が整備されていれば治療可能な下痢や肺炎などで、助かるはずの多くの命が失われていました。世界の医療団日本は、南部チャンパサック県保健当局からの要請のもと、2012年10月から3年計画で小児医療プロジェクトを開始、2015年12月に現場活動を終了しました。プロジェクトでは、現地医療スタッフの育成や住民の健康への意識を高めるための啓発などの活動を実施してきました。プロジェクト開始当初、5歳未満児のうち、年1回程度外来受診する子どもが4~5人に1人であったのが、2015年には1人あたり年1回※1となるなど、大きな成果が表れており、医療サービスの質の向上と住民の意識の変化により、住民の間にその利用が確実に浸透しています。



人間開発指数

(188か国中) 141位

5歳未満の乳幼児死亡率

(出生1,000人中) 71.4人

平均寿命

66.2歳

医師の数

(国民1万人あたり) 1.8人

※1 同一患者でも1回の受診を1人と数える。現地保健局データより。

本プロジェクトは資金の一部を「日本NGO連携無償資金協力」の助成を受けて実施しています。

※人間開発指数・平均寿命 Human Development Report 2015 (UNDP)

※5歳未満児死亡率・医師の数 World Health Statistics 2015 (WHO)

Burkina Faso ブルキナファソ

長期支援



©Mylene Zizzo

人間開発指數

(188か国中) 183位

5歳未満の乳幼児死亡率

(出生1,000人中) 97.6人

平均寿命 58.7歳

医師の数

(国民1万人あたり) 0.5人

アフリカ西部の最貧国のひとつであるブルキナファソでは、乳幼児の栄養失調と高い妊産婦死亡率が問題となっています。ブルキナファソはサハラ砂漠南部のサヘルと呼ばれる土地が痩せている地域に位置しています。そのため、農作物がほとんど収穫できず、乳幼児は食糧不足による栄養失調を引き起こしています。また、女性が出産する間隔が短く、子どもへ十分な授乳ができないことも栄養失調の大きな要因となっています。世界の医療団は、2010年からブルキナファソ北部ジボ地方で、安全な出産の実現とともに、乳幼児を栄養失調から守るための取組みを続けています。医療施設の修繕、栄養剤や医薬品の供給、そして、医療スタッフの育成のほか、女性が安心して子どもを産み育てることができるよう、住民に対し、家族計画についての知識の普及も行っています。

Haiti ハイチ

長期支援



人間開発指數

(188か国中) 163位

5歳未満の乳幼児死亡率

(出生1,000人中) 72.8人

平均寿命 62.8歳

医師の数

(国民1万人あたり) 一

2010年にハイチを襲ったマグニチュード7.0の大地震では、約22万人が命を落とし、210万人が住む場所を失いました(国連発表)。震災前から現地で医療支援活動に従事していた世界の医療団は、発災直後から緊急医療支援活動を開始し、首都ポルトー・プラヌを含む、被害の最も大きかった4つの地域で移動クリニックを展開しました。震災前からインフラが限られていたハイチでは、大地震から5年が経過してもなお、壊滅的な打撃から立ち上がることができておらず、多くの人々がいまだ避難所での生活を余儀なくされ、コレラの蔓延など、劣悪な衛生状態に起因する課題も山積しています。世界の医療団は、避難所へのクリニックの設置やコレラ対策、また、震災前から実施していたリプロダクティブヘルス改善のための取組みを強化するなどの活動を行っています。

Myanmar/Madagascar ミャンマー、マダガスカル

スマイル作戦

形成外科ミッション「スマイル作戦」では、先天性の疾患、戦争や事故などで顔面や身体の機能や外見に障がいを負った人々へ無償で手術を行っています。特に医療資源・技術が乏しい国では、生命に直接影響のない形成外科治療は後回しになるため、手術を受ける機会を得られずに成長し、そのハンディキャップにより社会から疎外されて生きている人々がいます。スマイル作戦は1989年に始まり、これまでに20か国以上で13,000人以上に手術を提供してきました。世界の医療団 日本は1996年から活動に参加し、これまでに延べ225名のボランティア医師・看護師を派遣してきました。また、スマイル作戦では、患者の治療だけでなく、現地の医療スタッフとともに診察や執刀を行うことによる技術移転も重要な目的のひとつとなっています。2015年11月末～12月初めに実施されたミャンマーでのミッションに参画した阿久津麗香麻酔科医は話します。「われわれが医療支援を目指すものは手術が必要な子どもが1人もいなくなることではありません。もちろんそうなったらうれしいですが、口唇口蓋裂の赤ちゃんはある一定の割合で生まれてくるものですし、やけどやけがを完全に防ぐことはできません。最終目標は、自国で必要な手術が適切かつ安全に行われることです。そのため必要なことは現地の医師の教育です」ひとりでも多くの人が、見た目による差別や体の不自由による困難がなく、前向きに生きていくこと。そのためには私たちはスマイル作戦を続けています。



◆ミャンマー

【回数】2回 【期間】6月21日～6月27日、11月30日～12月6日

【手術件数】63件 【派遣ボランティア】延べ10人

◆マダガスカル

【回数】1回 【期間】8月1日～8月10日

【手術件数】39件 【派遣ボランティア】2人

	ミャンマー	マダガスカル
人間開発指數(188か国中)	148位	154位
5歳未満の乳幼児死亡率(出生1,000人中)	50.5人	56.0人
平均寿命	65.9歳	65.1歳
医師の数(国民1万人あたり)	6.1人	1.6人

日本Japan

福島そうそうプロジェクト

東日本大震災とその後の原発事故により福島県相双地区(相馬市、南相馬市、双葉郡)は壊滅的な被害を受け、精神科医療保健システムもその例外ではありませんでした。世界の医療団は、相双地区での精神科医療の空白を解消するため、2012年1月から、現地NPO法人「相双に新しい精神科医療保健福祉システムをつくる会」をパートナーとして協働で活動を続けています。現地に精神科医、看護師、臨床心理士の医療ボランティアを派遣し、クリニックでの診療のほか、住民へのアウトリーチ(戸別訪問)や仮設住宅でのサロン活動などを行っています。震災から4年以上が経過し、現地では「復興のはさみ状格差」と言われる現象(時間の経過とともに、復興の差がはさみの刃のように開いていくこと)が見られます。「津波による被災や喪失を乗り越えて、新しい生活を希望とともに歩み始められている方々もいらっしゃれば、一方では、出口の見えない重さを抱えて相変わらず苦しんでいられる方々、悩みや苦しみがより重くなっている方々と、生活の様子にも開きが見えます」(横内弥生臨床心理士)震災の爪あとは住民のこころにいまだ深く残っており、今後も継続した支援が必要とされています。



川内村こころのケアプロジェクト

福島県川内村では、2012年4月に警戒区域解除となったことにともない、住民の帰還が可能となりましたが、村で生活をしている人々のうち約4割が65歳以上で、若い世代は川内村には戻らず県内外のほかの市町村に移住している傾向があります。そのため、ひとりで生活する高齢者が増加し、認知症を発症するケースが増えています。このような状況を受けて、世界の医療団は、川内村保健福祉課に精神科医を派遣し、高齢者が暮らしやすい村づくりへの助言をするとともに、認知症予防講座や認知症となった方の家族に向けた相談会などをしています。



東京プロジェクト (ホームレス状態の人々の精神と生活向上プロジェクト)

東京・池袋周辺地域で精神障がいを抱えながらホームレス状態にある方々に、医療、福祉などの包括的な支援を行う東京プロジェクト。ホームレス状態にある方々の推定障がい保持率は、約4~6割であるというデータがあります(ばとむあっぷ研究会、2008,2009年)。精神疾患や知的・発達障がいにより地域社会に溶け込めず、また、行政による支援からも漏れ、路上や街中で孤立してしまうのです。路上生活に至った背景や生きづらさの原因は個々に異なるため、画一的な支援ではそれぞれのニーズに十分に対応することができず、より柔軟な支援が必要な人ほどホームレス状態から抜け出すのが困難という現実があります。東京プロジェクトでは、ホームレス状態にある方々へのアウトリーチ(夜回り)を行うとともに、シェルターの提供や住まい探し、社会福祉手続きのサポート、地域活動への参加機会の提供など、心身ともに安定した生活を実現するための活動を行っています。

また、2015年11月には、フランスやアメリカでの成功支援モデルである「ハウジングファースト」をテーマにした国際シンポジウムを開催しました。ハウジングファーストとは、その名の通り、利用者は即時に自身が契約する地域のアパートに入居すると同時に、個別のニーズに応じた生活再建サポートを利用することができます、という支援モデルです。東京プロジェクトはこの支援モデルを取り入れて構成されており、今後の日本におけるホームレス問題対策として期待されています。



人間開発指数

(188か国中)20位

5歳未満の乳幼児死亡率

(出生1,000人中)2.9人

平均寿命

83.5歳

医師の数

(国民1万人あたり) 23.0人

証言活動

イベント(抜粋)

■ブース出展

アースガーデン灯・夏・秋・冬／アースディ東京・名古屋／大阪マラソン
グローバルフェスタ／世田谷パン祭り／フレンチフルーミーティング
よこはま国際フェスタ 他

■チャリティイベント

クリスマスチャリティ抽選会／支援者の集い

■活動報告会



©大沢隆

メディア(抜粋)

親善大使 滝川クリスティさんからのメッセージ

親善大使就任5年目の節目とともに、世界の医療団日本も設立から20周年を迎えました。

ACキャンペーンは2015年6月で終了しましたが、その後も様々な形で団体の広報活動に参加させていただきました。

今後も、世界の医療団の活動に参加しその経験を多くの皆様にお伝えすることで、医療アクセスのない最も弱い立場にある人々のために貢献したいと思っております。



<テレビ>

■NHK【2015/6/16 ニュースウォッチ9「東京プロジェクト】

<ラジオ>

■NHKラジオ【2015/8/18 先読み！夕方ニュース「東京プロジェクト】

<新聞>

■福島民友【2015/5/29 「東日本大震災支援プロジェクト】

■福島民報【2015/5/29 「東日本大震災支援プロジェクト】

■読売新聞【2015/10/26 「大阪マラソン」(山脇枝里子看護師)】

<英字紙>

■Financial Times【2015/6/24 世界の医療団ギリシャ】

■The Japan Times【2015/11/1 「東京プロジェクト」「東日本大震災支援プロジェクト】

<雑誌>

■週刊朝日【2015/9/18 「東京プロジェクト】

<オンライン>

■朝日新聞デジタル【2015/8/4 世界の医療団フランス】

■ダイヤモンド・オンライン【2015/11/27 「東京プロジェクト】

キャンペーン

■1000人のスマイル作戦 & ラオス小児医療プロジェクト応援キャンペーン

「スマイル作戦」と「ラオス小児医療プロジェクト」で治療を受ける子どもたちとその家族に向けて絵やメッセージを贈り応援するキャンペーンを実施しました。2015年度は、26か所の施設、イベント会場で開催し、延べ3,362人をご参加いただきました。インスタンクカメラやクレヨンを使って完成させたたくさんあたたかいメッセージを現地に届けることができました。

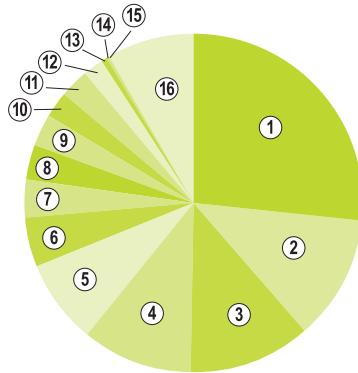


2015年度決算

世界の医療団は、1名の監事による会計及び業務の内部監査と、外部の独立した公認会計士による会計監査を毎年度受けています。

収入(単位:日本円)	226,374,864	支出(単位:日本円)	184,787,120
寄付	118,286,788	プロジェクト(医療支援+証言活動)	131,570,695
助成金	104,917,093	募金事業	46,330,579
収益事業	1,015,894	商標権使用料等事業	1,273,507
謝礼ほか	1,925,089	管理費	5,612,339
会費	230,000		

◎プロジェクト費内訳



①ラオス小児医療プロジェクト	26.9%
②シリア/緊急支援プロジェクト	11.8%
③ネパール/緊急支援プロジェクト	11.7%
④東京プロジェクト	10.7%
⑤東日本大震災被災地支援プロジェクト	7.9%
⑥スマイル作戦	4.9%
⑦バヌアツ/緊急支援プロジェクト	3.5%
⑧ハイチ/感染症対策、リプロダクティブヘルス	3.3%
⑨マリ/プライマリーヘルスケア	3.0%
⑩ラオス/周産期医療プロジェクト	2.7%
⑪ブルキナファソ/母子保健プロジェクト	2.6%
⑫ニジェール/プライマリーヘルスケア、母子保健プロジェクト	1.9%
⑬難民支援プロジェクト	0.7%
⑭エボラ/緊急支援プロジェクト	0.3%
⑮新規プロジェクト調査(常総被災地支援ほか)	0.03%
⑯証言活動*	8.1%

*ニュースレター発行、MdMの活動紹介イベント、写真展など開催、NGOイベントへの参加等

世界の医療団は「認定NPO法人」として東京都より認定されています。

世界の医療団へのご寄付は税制上の優遇措置を受けることが出来ます。

政策提言(アドボカシー)

■厚生労働省へSDGs採択に伴い、貧困者や住まいのないすべての人への保護を訴えた。

国の年末年始の生活困窮者の支援施策を求める要望書を提出し、意見交換を行った。

■渋谷区に海外事例ハウジングファーストによる支援を紹介・提言した。

■アメリカおよびフランスよりゲストを招きハウジングファースト国際シンポジウムを開催した。